

阪神・淡路大震災から 15 年

伝えていきたい防災力



企画意図

阪神・淡路大震災から15年目を迎えた今、被災地に震災の爪痕は、ほとんど残っていません。震災後に生まれた子供は、中学生になり、震災を体験していない人も増えています。

しかし、月日とともに記憶は薄れていますが、震災の体験は、風化させてはいけません。阪神・淡路大震災以降も、新潟県中越地震や岩手・宮城内陸地震など、大きな被害をもたらす地震も相次いでいます。

そこで、この作品では、阪神・淡路大震災、そして、その後の大震災を検証し、震災が残した教訓を確認しながら、地震に強い街づくりと取り組むには、どのような心がまえが必要なのかを考えていくものです。

監修者・推薦の言葉

阪神・淡路大震災から15年目を迎えました。その間、新潟中越地震など大きな被害をもたらす大地震が、頻発しています。日本列島は、阪神・淡路大震災以降、地震多発時代に入ったといわれています。この15年の間、私たちは、大震災から数多くのことを学んできました。しかし、その一方で、あの悲しい震災の記憶が風化しつつあることも事実です。今一度、過去の震災を学び直し、私たちの生活を見直す必要があると思います。地震そのものは、自然現象で人間の手では止めることはできません。しかし地震による災害は、私たち自身の努力で何分の一にも小さくすることができます。その鍵を握るのが「防災力」です。この作品は、過去の大地震を検証しながら、防災力を高める必要性を説得力のある映像で語っています。地域における防災学習の最適な教材となっています。

東京大学生産技術研究所 准教授 加藤孝明

作品の概要

■阪神・淡路大震災から15年

2010年1月17日、神戸で開かれた「阪神・淡路大震災1.17のつどい」の様子。ろうそくに灯をともし、黙とうする被災者の方々にマイクを向けた。6434人が犠牲となった大災害から15年が過ぎた今、私たちは、阪神・淡路大震災や、その後に起きた数々の大地震から、様々な事を学んできた。

■マグニチュード7.3の巨大地震—阪神・淡路大震災

阪神大震災で特に大きな問題になったのは、建物の倒壊、二次災害・火災、被災生活のあり方だった。そのひとつひとつを改めて検証していく。

そして、大震災は、人と人とのつながりの大切さを見直すキッカケともなった。

■地震の正体とは・地震の起こるしくみ

阪神・淡路大震災は、どのようにして起こったのか。そのメカニズムをCGで、わかりやすく解説する。また、日本列島の内陸では、約2000もの活断層があり、その活断層によっても地震が起きる事を伝える。

■海で起こった地震—十勝沖地震と津波

2003年の十勝沖地震では、何度も津波が押し寄せ、大きな被害を出した。津波は、どのようにして起きるのか。津波の恐ろしさを過去の映像で検証していく。

■被災地のあり方が問われた新潟県中越地震

2004年の新潟県中越地震では、多くの被災者が長い避難所生活を余儀なくされた。避難所でのトラブル、そしてエコノミークラス症候群という病気にも関心が集まった。地震が起きた時の日頃か

らの備えが、大きな課題ともなった。

■中越地方を再び襲った大地震—新潟県中越沖地震

2007年、新潟県中越地方を再び大地震が襲う。家屋の倒壊など大きな被害が出たが、ここでは自主防災組織が力を発揮し、被害を最小限にとどめた地域もあった事を報告する。

■岩手・宮城内陸地震—土砂災害の脅威

2008年、震度6強を記録した岩手・宮城内陸地震。巨大な地滑りが発生、土石流は沢を下り温泉旅館を押し潰した。山地が国土の70%を占める日本列島では、地震によって起こる土砂災害に、どう対応するか、これからの大きな課題となっている。

■大地震に備える—これからの防災対策

地震は、いつ、どこで起きても不思議ではない。震災は、深い悲しみと共に防災のための貴重なメッセージも伝えている。過去の震災の教訓を、どう活かすかが今、問われている。

監修 東京大学大学院工学系研究科
都市工学専攻 教授 小出 治

東京大学生産技術研究所
准教授 加藤孝明

企画・製作統括 高木 裕己

脚本・演出 川崎けい子

VHS・DVD [カラー約23分]

●お問い合わせ、お買い上げは……

有限会社 博映商事

TEL 092-741-0306 FAX 092-741-6628

〒810-0073 福岡市中央区舞鶴1-3-31-220

【HP】 <http://hakuei-shoji.jp> 【E-Mail】 info@hakuei-shoji.jp